



書評

[評者]

堀越 勝

国立精神・神経医療研究センター
認知行動療法センター特命部長

入職 1 年目から現場で活かせる!

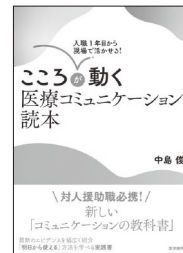
こころが動く 医療コミュニケーション読本

中島 俊 著

●A5 頁 152 2023 年 8 月

定価: 2,420 円 (本体 2,200 円 + 税 10%)

[ISBN978-4-260-05282-5] 医学書院刊



誰もが経験済みのことだと思うが、ゴミ出しをしようとしているところに「ゴミを出せ」と言われて、すっかりスネ夫になってしまった。逆にやるかやるまいかと迷っていると誰かの一言でにわかにやる気満々になったなど、言葉がけのタイミングや投げられた言葉によって思いも寄らない方向にこころが動かされることがある。言葉がけ 1 つでこのようにこころが動くのならば、医療における言葉がけがどれだけ患者や医療スタッフのこころに影響を及ぼすかは自明のことである。もしかすると、患者の治療動機や治療継続性を高めるための特効薬は、医療スタッフ側のコミュニケーションスキルそのもののなのかもしれない。

米国の医療現場で発生した訴訟問題の分析結果を見ると、訴訟問題の約 7 割は患者と医療スタッフ間の人間関係問題であり、内容的には「配慮がない」、「話を聞いてくれない」、「情報を適切に渡してもらわなかった」など、大半はコミュニケーションの問題だとされている。米国は訴訟社会と言われる通り、医療現場で起こる問題が訴訟という形で表面化しやすいのだろう。一方日本は「和を以て貴しとなす」の国であり、コミュニケーション問題は表に出づらいのかもしれない。しかし、見えないすなわち問題なしではなく、患者や医療スタッフが傷ついているのにもかかわらず、「我慢すべきだと思う」、「周りとの不和を避けたい」などの理由から表面化しないのだとしたら、ケアの観点から、その背後には巨大で深刻な問題が横たわっていることになる。

今回、『こころが動く 医療コミュニケーション読本』が医学書院から出版された。まさに前述の問題に真っ向から取り組んでいる本であり、週刊医学界新聞に連載されて好評を博した内容をまとめたものでもある。著者の中島俊先生は評者が過去に職場の同

僚として働いた人物で、学術的な面だけでなく、臨床的にも信頼できる。本を手にとってみると、サイズの厚過ぎず薄過ぎずで、ちょうど良い分量である。文体も読みやすく平易なですます調で、実際の対話例などが漫画チックに載せられており、構えて専門書に取りかかるといった堅苦しさは感じない。この領域のテーマの海外の翻訳本は得てして分厚くて、文字ばかりで扱いづらい。「コミュニケーションの本がわかりづらい」ということになれば、それこそお話にならない。しかし、本書にはイラストや図解などが豊富に用いられ、読者が理解しやすいようにと施された仕掛けがそこそこに見つけられる。例えば、随所に QR コードが載せられており、そこからさまざまな資料を入手することができる。つまり、本の厚さ以上の情報が紙面に盛り込まれていることになり、それを手軽に持つて歩くことができる工夫は素晴らしい。また気楽に読めるコラムが散見され、コラムを拾い読みするだけでも面白い。

中をのぞいてみると、第 1 章では職業人として押さえておくべき「医療者がもつべき倫理観・態度」に触れて土台固めをしたうえで、第 2 章で「コミュニケーションの基本的なスキル」を紹介する。医療者の誰もがもっていないかもしれない基本スキルについて解説した後、第 3 章では「状況に即したコミュニケーション法の選択」を扱っている。ここでは、特に最近注目されている共同意思決定 (SDM) や動機づけ面接 (MI)、今回のコロナ禍でのコミュニケーションの問題点、オンライン診療での注意点など、最新のホットピックスを網羅的に、そして具体的に取り上げている。締めくくりの第 4 章は「共感力を高めるために医療者ができること」、つまり個人が自身の共感力を鍛えるためにできることを紹介している。基本的な

スキルは当然のこととして、ますます腕を磨くための自己鍛錬の方法とも言えるべき部分である。

本書は医療コミュニケーションの全体像をつかむためのテキストとして、必ず読んでおきたい一冊である。同時に近年注目されている重要スキルについて触れている点もありがたい。つまり、一冊で基本から応用、そしてこれからの成長について知ることができる“一石三鳥”の本である。さらに初学者だけではなく、より詳しく学びたい読者のために充実した引用文献がリストさ

れている点は特筆すべき点である。日本の医療コミュニケーションの学術的な発展を考えたときに、大いに貢献してくれる部分だと思う。日本の医療教育は世界的にも優れていることは間違いないが、人とかかわる基本手法であるコミュニケーションスキルの訓練についてはどうなのだろうか。人とかかわる達人をめざすのであれば、今からでも決して遅くない。そしてそういう医療スタッフを育てたいのであれば、その第一歩を本書からスタートする。そうすれば、ここが動くこと請け合いである。